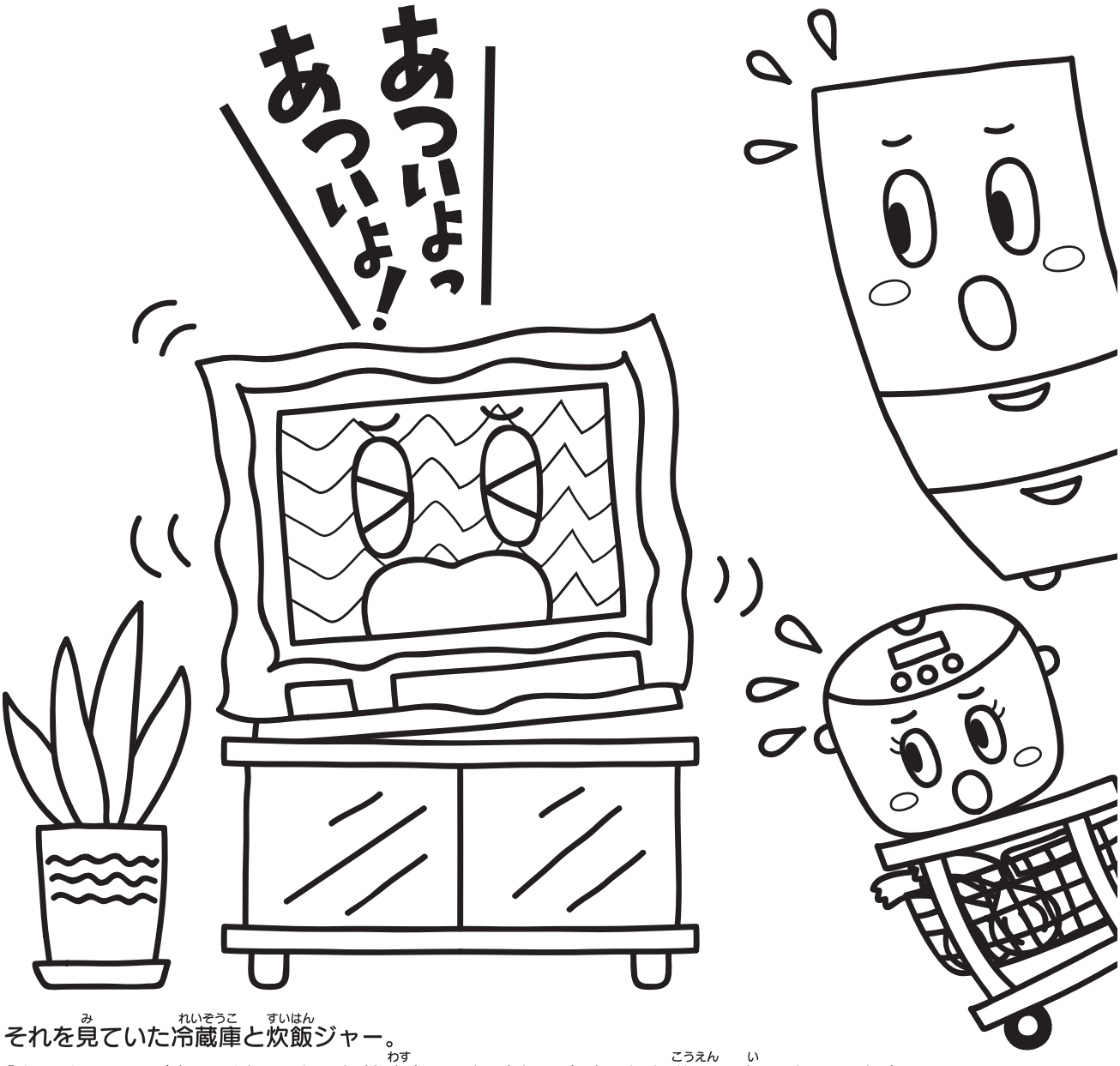
もったいないは ちきゅうをまもる ココロンパ!

九電グループ
ずっと先まで、明るくしたい。

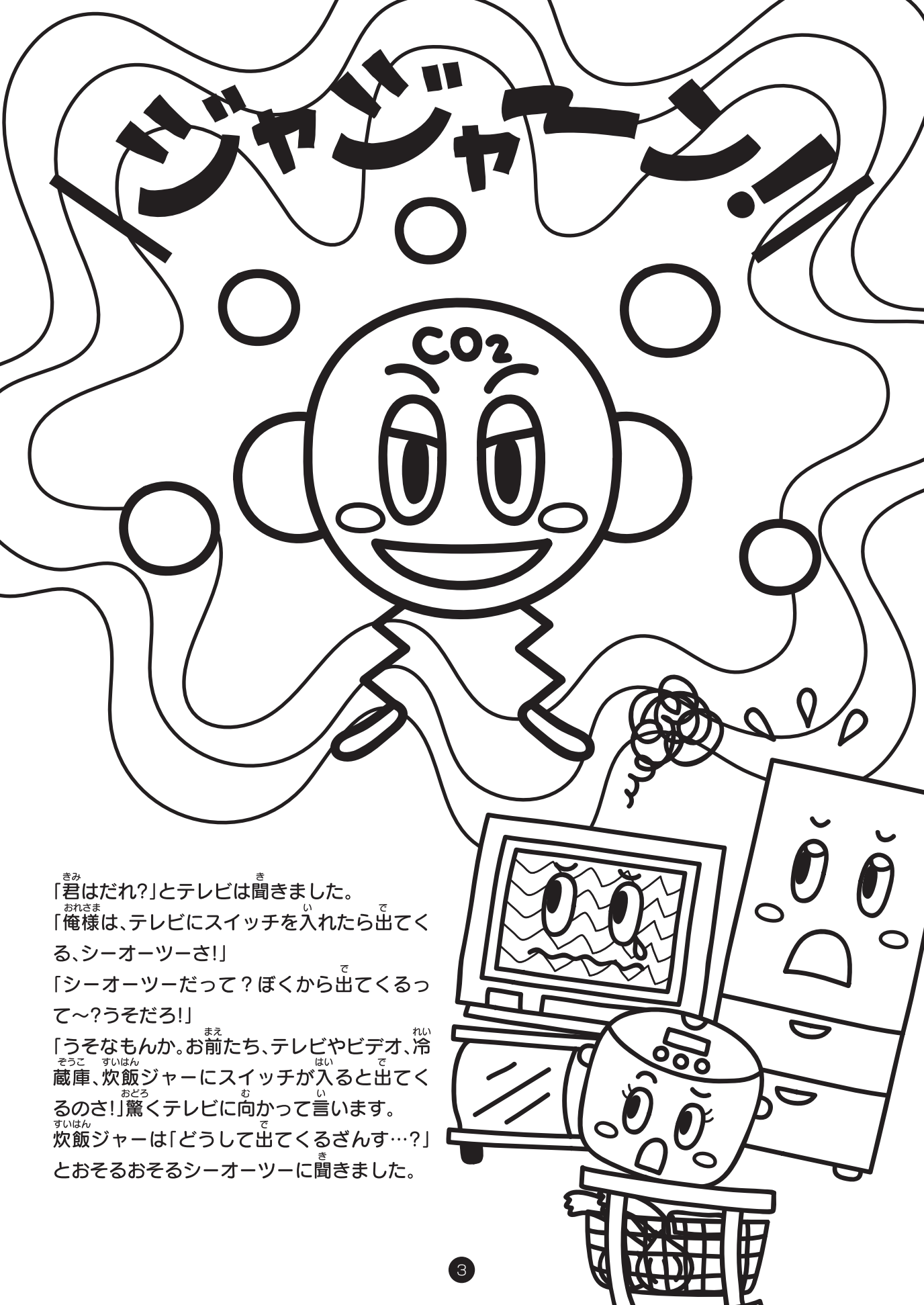
赤ちゃんが生まれてお兄ちゃんになった、
３歳のたくちゃんのおうちのできごとです。
ママと赤ちゃんは病院へおでかけ中。
パパとたくちゃんのふたりでおるすばんをしていました。
「今日もいい天気だね～。たくちゃん、公園に行こうか？」
「うん、すべり台がしたいよー！」
「よし行こう！」
そういって、たくちゃんとパパは出かけてしまいました。

ところが、だーれもいないたくちゃんのおうちから、何やら声が聞こえてきたのです…。

「誰か～！誰か～！熱いよ～ 熱いよ!! ぼくのスイッチ早く切ってよ――!!! 」
真っ赤になったテレビがドタバタしながら叫んでいます。

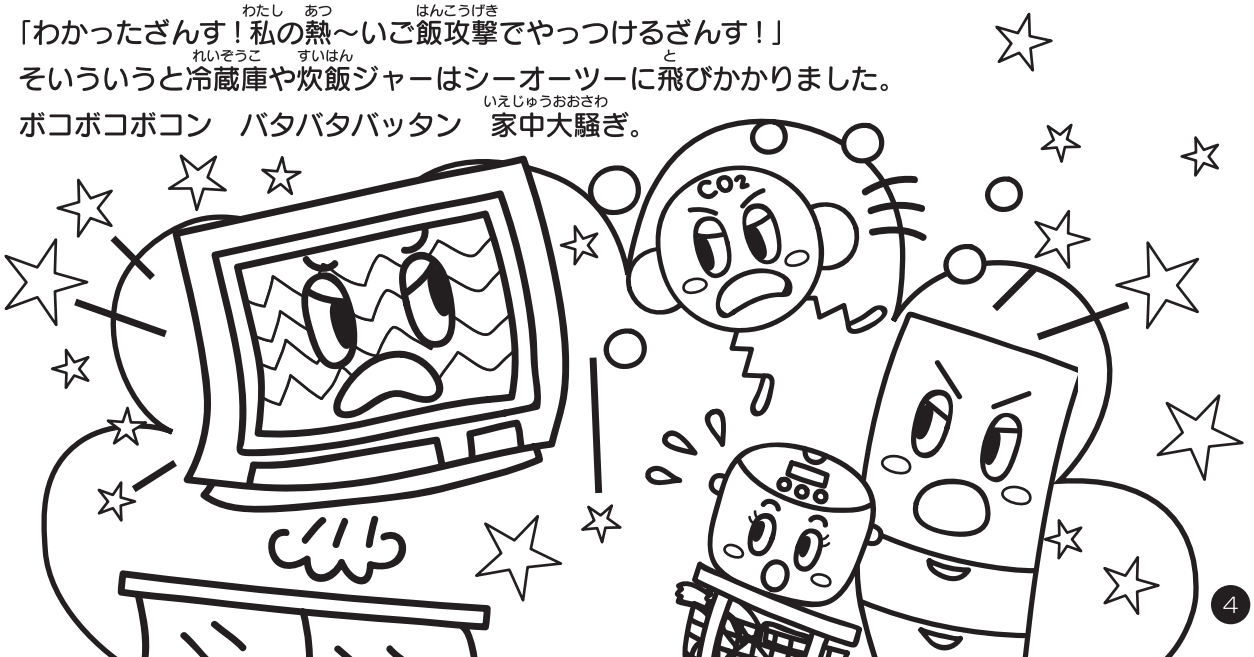


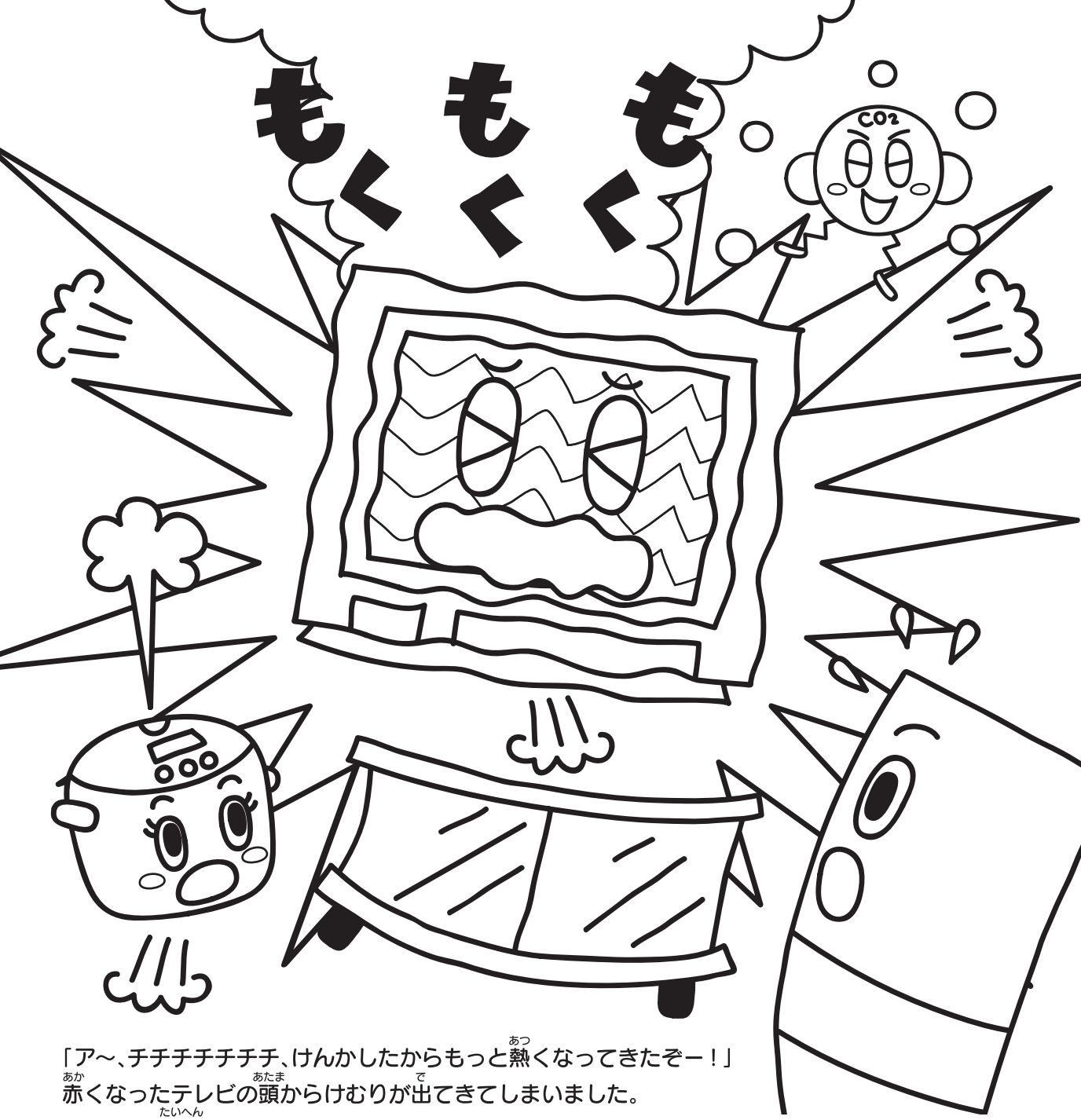
それを見ていた冷蔵庫と炊飯ジャー。
「あ～あ、テレビをつけたのすっかり忘れて、たくちゃんとパパ、公園に行っちゃったね～。
ぼくは歩けないから、助けてやれないよ～」
「私だって、ずーっとつけっぱなしだから、熱くてたまんないざんすわ。オホホホホ…」
「そういわずに、助けてくれよ!」とお願いしているテレビに冷蔵庫は、
「誰か帰ってくるまで待つしかないよ」とすましています。
みんなが話しているところに、
「お前達、うるさいな～！おうちの中にはだ～れもいないんだからさ～、
いくら言ったって聞こえやしないさ」
突然、聞いたことのない怖―い声がしてきたのです。



「君はだれ?」とテレビは聞きました。
「俺様は、テレビにスイッチを入れたら出てくる、シーオーツーさ!」
「シーオーツーだって？ぼくから出てくるって～?うそだろ!」
「うそなもんか。お前たち、テレビやビデオ、冷蔵庫、炊飯ジャーにスイッチが入ると出てくるのさ!」驚くテレビに向かって言います。
炊飯ジャーは「どうして出てくるざんす…?」とおそるおそるシーオーツーに聞きました。

「おまえ達は、み～んな、電気を食べて動くだろ？」と聞いているシーオーツーに
「それとなんの関係があるんだよ！」「そうざんす！」冷蔵庫や炊飯ジャーは言い返します。
「俺様は、その電気を使うと出てくるのさ。ゴミを燃やすときの火からも出るんだ。水道を出しっぱなしにすると、俺達がどんどん生まれてくるんだよ！」
「シーオーツーがいっていることはうそかもしれないぞ！ええーい、炊飯ジャー！このシーオーツーをやっつけて、おうちから追い出そうよ！」
「わかったざんす！私の熱～いご飯攻撃でやっつけるざんす！」
そういういうと冷蔵庫や炊飯ジャーはシーオーツーに飛びかかりました。
ボコボコボコン　バタバタバッタン　家中大騒ぎ。





「ア～、チチチチチチチ、けんかしたからもっと熱くなってきたぞー！」
赤くなったテレビの頭からけむりが出てきてしまいました。
「わ～～～大変だ～～！」みんなはパニックです。
「待って！けんかをやめてざんす！早くテレビのスイッチを切ってあげないと、このままじゃあ、
壊れてしまうわん」といっしょうけんめいに話す炊飯ジャー。
「スイッチが入っていると俺達はどんどん生まれてくるからな！アハハハハ…」とシーオーツーは
大きな声で笑っています。
“！”炊飯ジャーはいい事を思い出しました。
「『もったいないはちきゅうをまもるココロンパ』ってヒミツのことば知ってるでざんす？
そのことばを、優しい心で唱えると、願い事が叶うって聞いたことがあるわん。
ねえ、みんな、テレビのために声に出して叫びましょ！」

もったいないはちきゅうをまもる ココロンパ!

みんなで声を合わせて『もったいないはちきゅうをまもるココロンパ』と言いました。
ところがテレビのスイッチは切れません!
「どうして切れないんだろう～？」冷蔵庫は困り果てました。
「そうだわ！『やさしい心』が足りないざんすよ！スイッチを切るにはやっぱり、ママやパパ、たくちゃんたち、みんなの助けが必要ざんすよ！」と力強く話す炊飯ジャーの言葉にみんなは、

うん、うん‥‥

そういってみんなでたくちゃんたちを呼ぶことにしたのです。

あわてて帰ってきたみんなに、炊飯ジャーはこれまでのことを話しました。

もったいないはちきゅうをまもるココロンパ！

炊飯ジャーは、「さあ、みんなもう一度言うざんすよ！そこで聞いているお友達もいっしょに！せーの！」

『もったいないはちきゅうをまもるココロンパ』

たくちゃんは、『テレビ君を助けてください！』と心で願いながら、スイッチを切りました。

パチ！

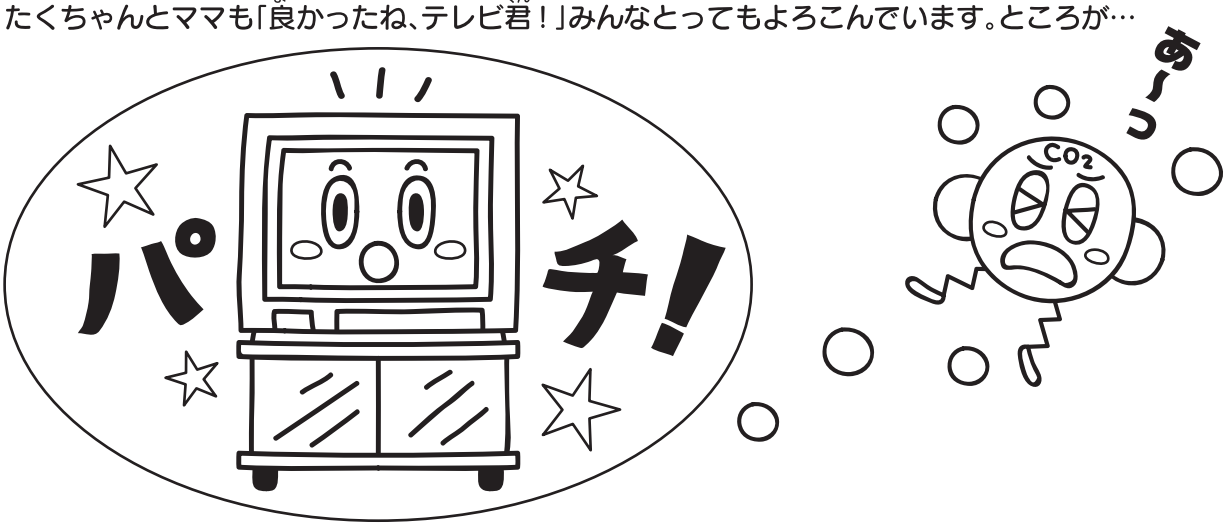
「わああ～、スイッチが切れたよーーー !!!! 」

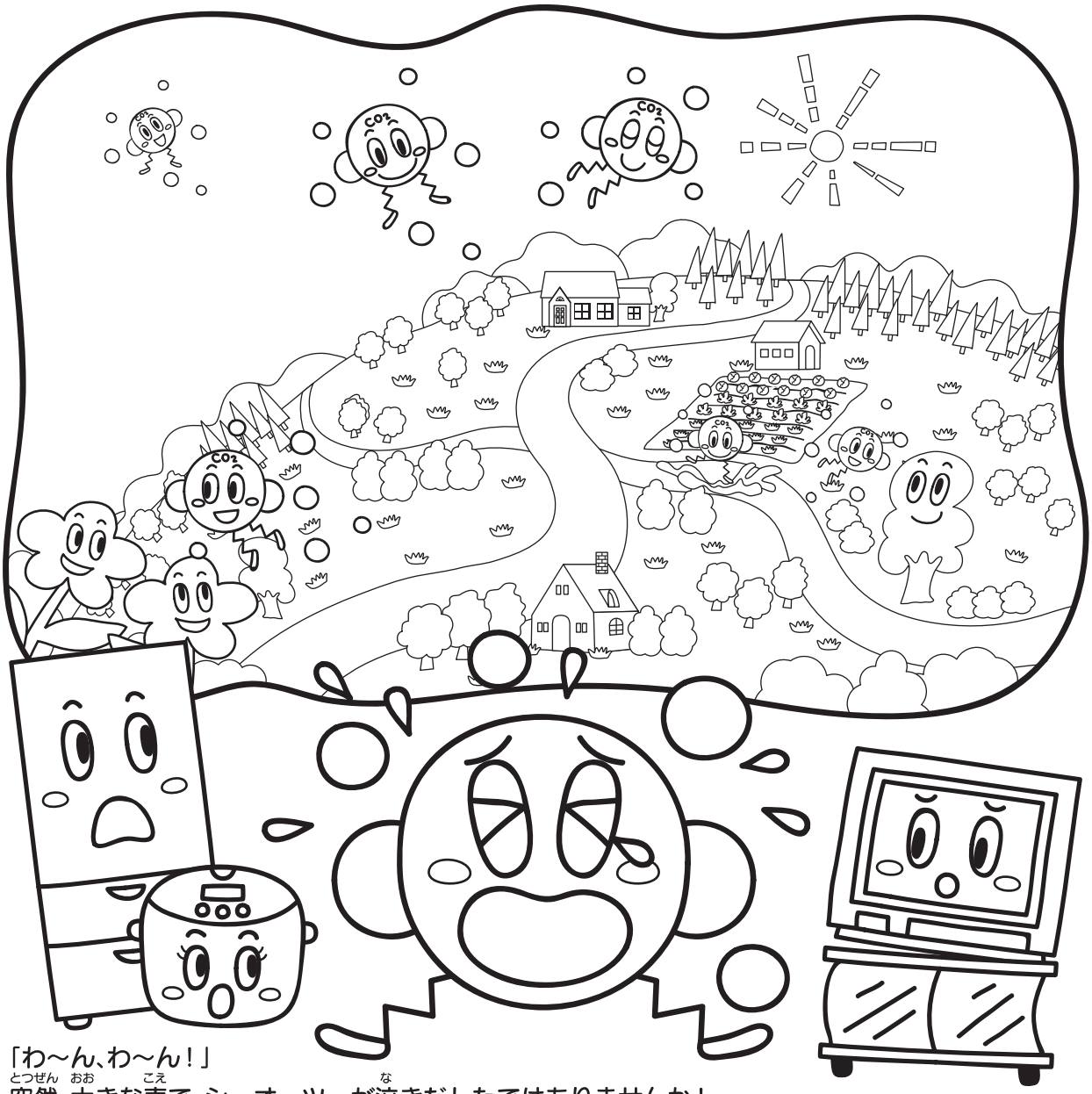
「やった～！これであのシーオーツーも消えるよ !! 」

テレビも冷蔵庫も炊飯ジャーも大喜びです。

「公園に行くとき、パパがスイッチを切るのを忘れていたよ！ごめんね！」とパパが言いました。

たくちゃんとママも「良かったね、テレビ君！」みんなとってもよろこんでいます。ところが…





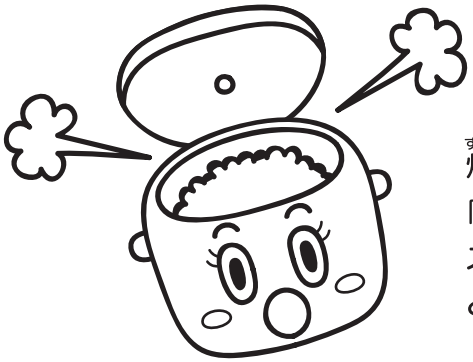
「わ～ん、わ～ん！」
突然、大きな声で、シーオーツーが泣きだしたではありませんか！
冷蔵庫は「どうしたんだよ、シーオーツー！テレビのスイッチが切れてそんなに悲しいの！」とシーオーツーに聞きました。
シーオーツーは「違うよ。みんなはぼくを悪者だと思っているだろ?ぼくだって、昔は人間や森、草や花、君達のようなテレビや冷蔵庫とも仲良く暮らしていたんだ。でも、人間が電気をたくさん使うようになって、たくさん生まれてきて、あっというまに悪いシーオーツーに変身してしまったんだ」
その悲しそうに話すシーオーツーを見ていたテレビや炊飯ジャーは、
「そうか～。シーオーツーは、たくさん集まったから、悪者に変身したんだね」
「かわいそうざんすね…クスン　クスン…」
シーオーツーは「ぼくたちが悪者に変身したら、どんな悪いことがおきるか、君達知っているかい？」とみんなに聞きました。
「知らない…」みんなは答えました。

シーオーツーは「君達が住んでいる、地球が病気になっていくんだ。暑い日が続いたり、逆に、雨がたくさんふりすぎたり。食べ物も少なくなったり、そんな大変なことが次々と起きてくるんだよ…」と困った様子で話します。

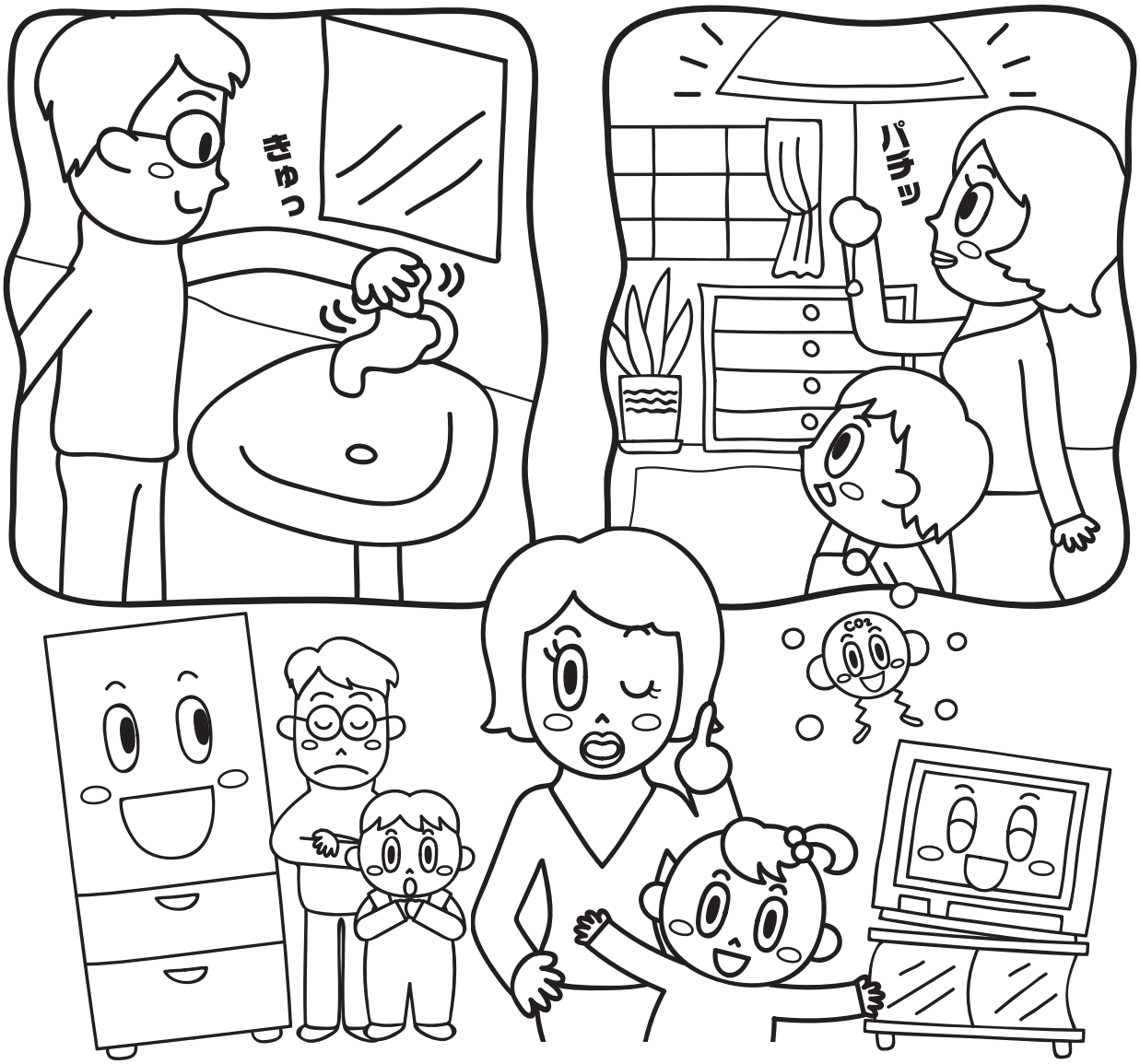
「えっ、そうなの！どうしたらいいざんす？」炊飯ジャーは驚きました。

「ぼくにいい考えがある！ぼく達シーオーツーがたくさん生まれてこないように、電気をたくさん使わないようにするんだ」シーオーツーはみんなを説得しています。

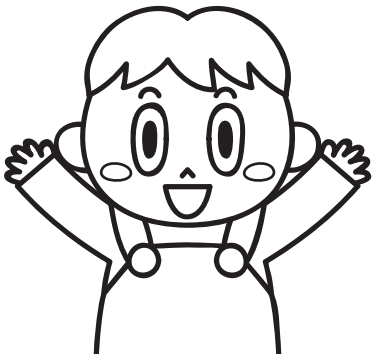
「でも～僕たち、電気がないと動けないよ…」みんながつぶやきます。



炊飯ジャーはパカっとふたをあけて、
「そうよ！そんなの、私たちだけではできないざんす！だって、
スイッチを入れるのは、私達じゃなくて、『人間』ざんすよ！」
とママたちを見て言いました。



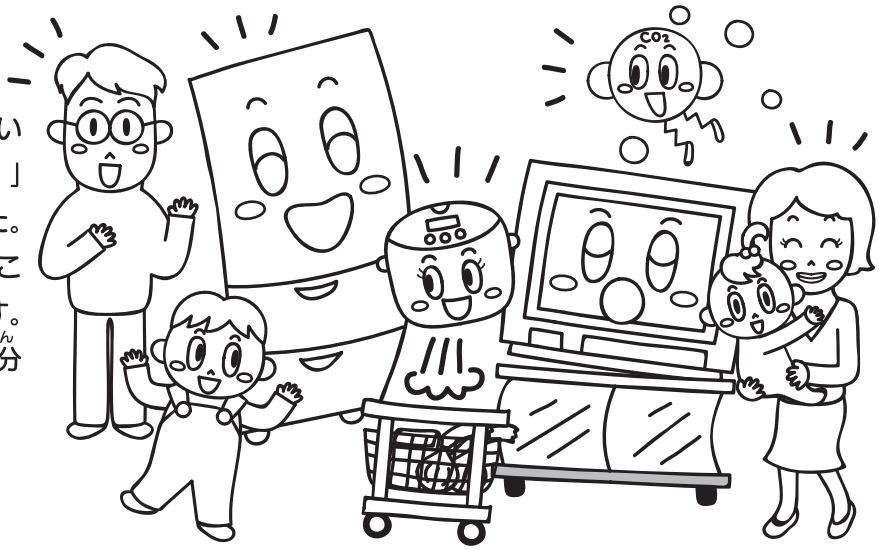
「そうね、シーオーツーや炊飯ジャーがいうように、私達が工夫しなきゃね。使うときだけスイッチを入れるようにしたり、水道も歯磨きの時出しっぱなしにしない。必要なときに必要な分だけ使う。むだ遣いをしない！」とママも真剣な顔。
「そうだね。いっつも『もったいないな～』という心を持つようにしたらどうだろう？」
パパも言いました。



そんな話を聞いていたたくちゃんは、
「ぼくね、ママやパパが言ったことを守るよ。そしてひみつの言葉を、いつも心で思っておくよ！ねえ、みんなもいっしょに歌おう！」
と元気よく言いました。

もったいないはちきゅうをまもるココロンパ！
つけっぱなしは許さない！

もったいないはちきゅうをまもるココロンパ！
シーオーツーも泣いてるよ！

みんなのやさしい心がつながれば
ちきゅうはきっと救えるさ！

たくちゃんは、それからというもの、「もったいないよ！」というのがくせになりました。
そして、みんなで約束したことをずっと守っているのです。
そう、地球のため、そして自分達のためにね！
よかった、よかった！
おしまい！